

第7章 外国人イメージの構造

——調査データに基づく考察——

村田光二

はじめに

私たちは眼前に存在する対象 (presentation) を、それが存在しなくなった後にも、心に描くことがある。心理学では、こういった記憶を中心とした心的作用に基づく存在を表象 (representation) と呼んでいる。つまり、表象とは対象を心に描いた像のことを指し、多くの場合記憶されているものと考えられている。もちろん、心に描いた像を再度眼前に存在する対象として再提示したものを、表象と呼ぶこともあるだろう。

しかし私たちは、物理的な意味では眼前に存在しない対象にかんしても、心的イメージを抱くことがある。たとえば「戦争」を考えてみればよい。私たちのなかに、直接戦争を目のあたりにしたことのある者は少ない。もちろん、メディアをつうじて戦争に接したことのある人は多いだろう。ニュースなどをつうじた本物の戦争の場合もあれば、映画視聴などフィクションの場合もある。いずれもメディアによって一度構築され、媒介されたものであって、厳密

な意味では「目の当たりにした」対象ではない。しかし、前者の場合の心的イメージは、制限され媒介されたかたちであったとしても、ひとまず自分の目で見た対象と考えてよいかもしれない。それでも、私たちが見たのは、たとえば「湾岸戦争」であり、「イラク戦争」であって、戦争一般ではない。にもかかわらず、私たちは戦争を「知っている」。

「外国人」という対象の場合にも、「戦争の表象」と同様の問題を抱えている。私たちは必ずしも直接外国人と出会うわけではない。現代の日本では外国人を目の当たりにする確率はかなり高まってきたが、誰にとってもそうだとはいえないだろう。また、私たちはある国の「特定の人」と出会うことがあるが、ある国の「人一般」と出会うわけではない。それでも、私たちはその国の人についての、漠然としていたとしても、イメージを描くことがある。加えて、特定の国を超えた「外国人一般」あるいは「外人」についてイメージを描くことさえある。

心理学研究が明らかにしてきたことは、個別事例を超えて抽象化されたイメージが、特定の事例の認知に影響を及ぼす点である。たとえば、デヴァインの研究では、アメリカの白人大学生を参加者として黒人にかんする刺激後を閾下でプライミングする実験をおこなった。実験群では提示されたうちの八〇パーセントが、比較対照の統制群では二〇パーセントだけが黒人関連語であった。その後「別の実験」と称して（人種不明の）ある人物についての行動記述文を読んで、印象評定を参加者におこなわせた。その結果、実験群の学生のほうが統制群の学生よりも、対象人物を「敵意が強い」と黒人ステレオタイプにそった方向で評定する傾向が認められた。この傾向は、人種的偏見の強い人でも低い人と同様に認められたのであった。このように、ある社会・文化のなかで獲得されたステレオタイプは、本人も気づかないうちに活性化し、後続の判断に自覚なしに利用されることがありうるのだ。就職面接の場面で、「女性」というだけで、あるいは「ある大学」の学生だというだけで、そうでない人と異なる扱いを受けたという事例は、

おそらく相当数にのぼるだろう。もちろん、明白なかたちでこういったことがあれば差別であり、法的な問題となる。暗黙の水準で、表沙汰にならないかたちで生じている可能性である。

こういった働きを生むカテゴリー水準の知識のことを一般に「スキーマ」と呼ぶ。対象となるカテゴリーが人間の社会集団である場合、伝統的に「ステレオタイプ」と呼ばれている。たとえば「セールスマンは話しがうまい」といった特定の職業従事者についてのステレオタイプが考えられる。社会心理学ではこれまでに多くのステレオタイプ研究を実施してきたが、その成果によれば、私たちはしばしば、ある人と遭遇したときに、その個人的情報だけではなく、ステレオタイプの情報を用いて認知してしまうことが示されている。このような過程を一般にステレオタイプ化 (stereotyping) と呼ぶ。

ステレオタイプ化は、ある人を型に当てはめて認知することであり、社会的に望ましくないと思われている。たとえば、就職面接の場面で、特定の大学出身であることが判断の根拠となることは一般には許されない。しかしながら、私たちはある個別の対象を認知するさいに、それが何であるか同定するためには、なんらかのカテゴリー的知識を利用する必要がどうしても生じる。たとえばある小動物を「犬」として認識するためには、それが犬であると「知って」いなければならぬ。心理学の用語を用いれば、「犬スキーマ」という知識をもっていなければならぬ。対人認知の場合には、ある人を特定の個人として同定するもつとも基礎的水準から、「人類スキーマ」で認知する最も抽象度の高い水準のあいだに、さまざまな社会集団やカテゴリーで同定する多数の中間水準がある。そのいずれかが（場合によっては重複したかたちで）利用されるが、遭遇するすべての人を個人の水準で認知し、記憶することは不可能であるだろう。共通性を持ちながら、個別に分化した対象として認知するためには、なんらかの中間水準を必要とする。進化的な視点からも、認知の経済性といった視点からも、有用な枠組み的知識としてステレオタイプを私たちは発

達させてきたと考えられるのである。

本稿で問題とする「ある外国人」という対象も、もちろんステレオタイプという概念で把握することができる。たとえば「日本人は勤勉である」といった単純な見方が繰り返し認められてきた。ステレオタイプにかんするもつとも古典的な実証研究でも、民族集団や国民集団に対する共有されたイメージが扱われた。しかしながら、外国人は外国人であるがゆえに、日常その集団の成員とは接する機会が乏しい。したがって、対象となる事例をよく知らず、記憶構造内に明確な知識として存在するかどうか対象国民によってはあいまいな場合がある。そこで本稿では、ある国の人一般について描く心的な像を、曖昧な言葉であるが、「外国人イメージ」と呼んで検討したい。

本稿では、調査データを用いて日本人の抱く外国人イメージを検討する。とくに、人柄と能力の二側面から検討する。近年のステレオタイプ研究は、多くの外集団がこの二つの対人認知の次元上で把握可能で、しかも評価の点で背反することが多いことを示してきた。日本人の外国人イメージにも、この両面価値的な傾向が認められるのかどうか検討したい。この作業を、これまで蓄積されてきた一連の「オリンピック研究」のデータを用いて実証的におこなうことが本稿の主たる目的である。この外国人イメージの研究は、オリンピック大会の前後でイメージ変化が認められることを明らかにしてきた。しかしその変化は好意度次元上のものであり、比較的短い時間の範囲内のものであった。ここでは、外国人イメージが二次元で把握可能であり、二次元上での諸外国人の評価は、日本とその国との関係が大きく変わらないかぎりは、長期間持続することも示したい。

1 日本人の外国人イメージ

社会心理学では偏見は一般に態度の水準の概念としてとらえられてきた。ステレオタイプやイメージが認知の水準の概念であるとしたら、それに感情的要素が加わったものが態度の水準である。「日本人は勤勉である」ことを「不快（ポジティブ）」に感じるならば、肯定的な態度だと考えられる。「○○人が怠け者である」と認知していて、それを「不快（ネガティブ）」にみなしたら、否定的な態度である。元の認知がもし事実に基づかなかつたとしたら、日常の意味でも偏見であるだろう。自覚しているかどうかはともかくとして、偏見に基づく行動が差別である。態度は、突き詰めてしまえば「好きか、嫌いか」の一次元で示されるもので、その背後に想定されるステレオタイプもまた、この研究の文脈では一次的に把握されることが多かった。

実際、過去の外国人イメージの実証研究は、ほとんどが一次的な測定をおこなって、偏見や否定的態度と同じに扱ってきた。たとえば日本でもっとも初期に外国人のステレオタイプを実証的に調べた原谷たちの研究でも、「ステレオタイプを通して示された好意性」を扱っている。⁽⁵⁾一九五八年におこなわれたこの研究では、カツツとブレイリーにならって、対象集団に当てはまる特性語をチェックさせる方法を用いて国民ステレオタイプを測定した。あわせて、対象集団の好悪を順位づけさせた。その結果、各国民集団にはそれぞれ独特の特性が帰属された。たとえば、大学生七〇人の五四パーセントがドイツ人を「科学的」とみなし、五一パーセントがフランス人を「芸術的」とみなし、三六パーセントがアメリカ人を「金持ちの」とみなしていた。しかし、各国民を通じての分析は、帰属された特性が好意的か非好意的かを判断し、その比率を求めて順位づけし、好悪の順位づけとの正の相関関係を確認したことだけであつた。

ステレオタイプと偏見に関する日本の古典的研究と考えられる、我妻洋・米山俊直「偏見の構造——日本人の人性

観」(二九六七)のなかで報告された実証研究も、これとはほぼ同じ方法を用いている。その結果によると、二七〇人の回答者のうち四五パーセントがドイツ人を「科学的」とみなしたことや、六一パーセントがフランス人を「芸術的」とみなしたことは、原谷たちの研究結果と一致する。他方で、アメリカ人については五四パーセントの回答者が「陽気だ」を帰属し、イギリス人については七三パーセントの人が「礼儀正しい」と回答した。さらに、五一パーセントがイタリア人を「陽気だ」とみなし、五四パーセントの人がインド人を「迷信深い」とみなした。こういった日常の多くの場面での行動を予測しやすい性格特性が、いくつかの国民のイメージとして挙げられやすいことが明らかになった。他方で、かならずしもイメージのはっきりしない民族集団も多かった。とくに、ロシア人、中国民族、インドネシア人、フィリピン人については、回答者の三〇パーセントに共通する形容詞が一つもなく、選択のバラツキが大きかった。好悪の順位を調べると、ヨーロッパ諸国の人とアメリカ人が上位を占め、朝鮮民族と黒人とが最下位であった。好悪の順位が中間にきたインド人は、回答率の二番目に高かった形容詞も「不潔だ」(二三パーセント)という否定的な用語であったが、「運動神経が発達している」(三三パーセント)や「陽気だ」(二五パーセント)が相対的に帰属されやすかった黒人よりも、好ましい人種態度をもたれていたことになる。我妻たちの研究でも、イメージの多様性は当然想定されていたが、多くの国に共通するイメージの構造を探るといふ視点はなかった。

もちろん、反感が強く、否定的態度をもたれているという点を実証することは、それだけでも意味はある。我妻たちは、日本人が黒人にたいして非常に否定的な感情、いわば「生理的嫌悪」と呼べるものをもっていることを、文学作品など、いくつかの資料を基に指摘している。こういった潜在的な社会的問題を指摘することによって問題意識を喚起し、問題解決への取り組みをうながす可能性がある。しかし、その否定的態度の背後に「黒人についての歪んだイメージ」があつてその改善が必要だとしても、具体的にどういふイメージなのか、必ずしも明確ではないだろう。

当てはまる形容詞の回答には、否定的用語だけでなく、肯定的用語も一定の比率で認められ、両面価値的な様相を示す場合もあった。それでも、ヨーロッパ民族と比べて、アジア民族（あるいはアフリカ民族）を低く評価する傾向は、日本人のもつ外国人イメージの構造的問題の一つと考えてもよいかもしれない。

アジア民族のなかでも、歴史的経緯から、我妻が調査をおこなった一九六〇年代では、朝鮮民族にたいする態度がとくに否定的であった。この態度は、第二次大戦後から現在までの長い期間をかけて、徐々に改善してきたと考えられる。しかしながら、その歩みは遅く、現在にいたっても十分な水準とはいえない。そういった歴史的、社会的背景のなかで、日韓相互のイメージを改善しようと試みた研究を、一九八〇年前後に辻村・金・生田が実施している。^⑤この研究では、ランダムサンプリングによる世論調査を実施して、韓国と韓国人についてのイメージを検討している。韓国についてだけであるが、代表性のあるサンプルを用いて日本人の外国人イメージを調べた古典的な労作といえる。また、韓国に修学旅行に行った高校生を対象に、韓国人と直接接触した経験がイメージ変化に及ぼす影響を調べたり、大学生を対象に特定の情報がイメージ変化に及ぼす影響を実験を用いて検討した。直接的接触や好意的情報は肯定的な態度変化につながり、現実の社会問題に貢献できる要因を見出すことに成功したといえる。しかし、外国人イメージは肯定的・否定的という次元に還元され、好悪の感情あるいは態度として測定された。ここでも、外国人イメージの構造をとらえる視点は乏しかった。

以上の研究にたいして、外国人イメージを複数の次元でとらえようとした研究も散見される。たとえば堀の研究では、多数の国について、「芸術・文化」「経済的豊かさ」「知的能力・勤労意欲」の三つの点について、日本と比べてすぐれているのか劣っているのか評価を求めている。^⑥その三次元の評定結果を基に国をパターン分類することもおこなった。この先駆的試みは興味深いが、あくまでも「国」のイメージの研究であっただろう。^⑦また、後に紹介する外

国人イメージとオリソピックにかんする研究の嚆矢となつた高木・坂元のソウル大会についての研究では、イメージを多数の形容詞尺度に評定させ、その結果を因子分析し、「野蛮性」と「権謀術数性」の二次元を見出している¹⁷⁾。これに別に測定した「好意度」を加えた三つの次元で各国民のイメージをとらえ、さらにはその変化をとらえる試みは特筆に値する。しかし、回答者が一つの大学の学生で、その数も百名程度で十分ではないし、対象国民も日本を含めて一〇であり、結果の一般化可能性には疑問が生じる。また、「野蛮性」「権謀術数性」という評価の次元がどんな意義をもつのか、直観的な理解は難しい。

2 社会的ステレオタイプの二次元モデル

グリックとフィスクは、女性差別の問題の背後にある偏見に二通りがあると考え、両面価値的性差別理論を提唱した¹⁸⁾。一般に、男性は作動性が高く、女性は共同性を特徴とするというジェンダー・ステレオタイプがあると指摘されている¹⁹⁾。もし、男性と同様に課題遂行能力（作動性）が高い女性が出現したとすると、本来女性が示すべき規範的特徴（共同性）に欠ける人物として非難されやすい。その結果、能力の高い女性にたいして敵対的な態度が、主として男性によって社会的に示されやすくなる。これは、女性の社会進出を直接阻害する敵対的偏見と呼ばれている。こういった状況で女性は、直接仕事にかかわる能力だけでなく、対人関係を調整する能力も高いことを示し続ける必要が感じられ、しばしば葛藤する複数の役割期待のもとで苦しんできた。

このような偏見を抱く社会でも、他方で女性を慈しみ、保護し、愛情をもって接してきた人が多かったと考えられ

る。この点では女性を高く評価し、肯定的にとらえてきたことになる。しかし、この態度は慈悲的偏見と考えられ、女性を家庭にとどまらせ、結果的に社会的進出を阻んできた心理的要因の一つであるだろう。グリックとフィスクは、この態度の背後には、女性に「あたたかさ」を認めるが、能力の点では男性に及ばないというステレオタイプが考えられると主張した。この慈悲的偏見は、女性を「その個人の好みや特徴に基づいた役割」にとどまらせ、男女間の社会的不平等を正当化し、維持する機能を果たすだろう。このように、反感だけでなく、直接的には好意であるが、保護的な態度を示すことも偏見の一種だと、グリックたちは指摘したのである。

以上の二種類の偏見は、「あたたかさ（人柄）」と「潜在的」能力」との二次元を想定し、一方が肯定的なときに他方が否定的という関係になっている。異なる次元上だが、感情価の点で負の相関関係になっており、両面価値的性差別として議論された。

この議論は、けれども、もっと幅広く集団間関係一般に成り立つだろう。実際フィスクとグリックは、ステレオタイプの内容モデルと呼んで、ジェンダー関係以外にも広く適用するように理論を拡張した¹⁵。集団関係には、友好的であるのか競争的（または敵対的）であるのかという側面が考えられる。この側面は、先の人柄次元での評価の決定因となるだろう。また、集団関係には、友好性とは独立に、地位の上下が考えられるだろう。この側面は、能力評価の決定因となるだろう。このモデルでは、友好的関係でなおかつ地位の高い集団にたいしては、二次元上とも肯定的なステレオタイプが考えられる。逆に、敵対的で地位の低い集団にたいしては、人柄でも能力でも否定的なステレオタイプが考えられる。彼女たちは、二次元の高低の組合せによって生じる四つのステレオタイプを、表7・1のようにまとめている。表のカッコ内には、アメリカにおける対象集団の具体例を挙げている。

しかし、両次元の肯定・否定性が一致する集団は実際には少なく、両次元での評価が食い違う両面価値的なステレ

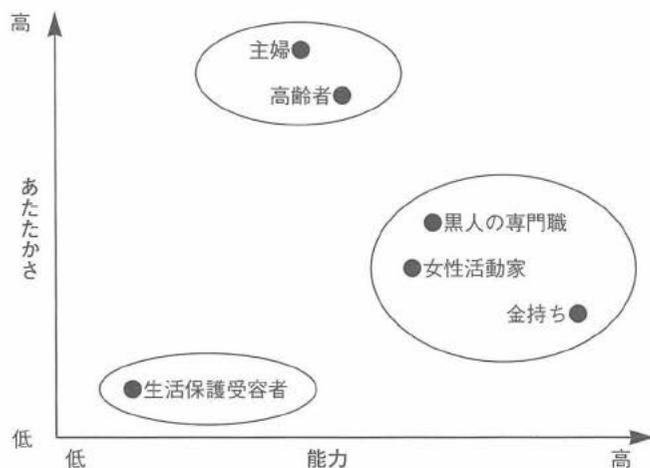
表 7 - 1 外集団の 4 つのタイプと対応する偏見*

		能力	
		低	高
あたたかさ	高	<ul style="list-style-type: none"> ・低地位、非競争的 ・温情主義的偏見 哀れみ、同情 (例；高齢者) 	<ul style="list-style-type: none"> ・高地位、非競争的 ・賞賛 誇り、賞賛 (例；内集団)
	低	<ul style="list-style-type: none"> ・低地位、競争的 ・軽蔑的偏見 軽蔑、反感 (例；生活保護受給者) 	<ul style="list-style-type: none"> ・高地位、競争的 ・嫉妬的偏見 嫉妬、妬み (例；金持ち)

*各欄には、集団間関係（地位の高低と競争性）、偏見の種類、伴う感情、具体的な集団例を記述してある。

出典：Fiske, et al. (2002) p.881 Table 1 より作成。

図 7 - 1 社会集団の2次元評価



出典：Fiske, et al., (2002) p.895 Figure4 より作成。

オタイプが多いと考えられた。そして、両面価値的なステレオタイプこそが、偏見や差別の源泉として問題となりやすい。とくに、一つの次元で高く評価することが、他の次元で低く評価することを正当化する役割をはたす点に注意が必要である。フィスクたちの調査研究では、以上の考えが繰り返し実証された。ステレオタイプは好悪の次元だけでとらえることは難しく、人柄と能力の次元の組合せで内容を把握するのが適切であることを示したのである。また、人柄は友好性、能力は地位の高低という集団関係の特徴によって、その次元上の程度が決まってくることも実証した。加えて、二つの次元は相互に相反する傾向があって、両面価値的な性質をもちやすいことも示した。そのうちの研究3の結果を図7・1に示したが、この二次元上で、多くの集団は両面価値的に評価された¹⁶⁾。

日本の具体的な例では、「東大生ステレオタイプ」などが考えられる。荻谷剛彦によれば、東京大学の学生は「世間の風当たりが強い」と感じ、初対面の人に大学名を言うのに抵抗がある」人の比率（七十二パーセント）が、他の有名大学の学生（三七パーセント）よりもずっと高い¹⁷⁾。そこで紹介されている学生の言葉によれば、「『東大』という大学名のもつイメージにはネガティブな要素が確実に存在している。世間一般に流通している『いわゆる』東大生像を通して自分を判断されたくない、という東大生の思いがこの数字に反映されている」とこの結果は解釈できる。つまり、東大生にはネガティブな要素をともなったステレオタイプがあり、特定の東大生はそのようにステレオタイプ化されることを避けるために、大学名を言わないようにしているというのである。荻谷剛彦の分析によれば、その結果東大生は「普通志向症候群」にかかっている、東大生らしく見えないように、普通に見えるように行動する。たとえば、「勉強するよりもファッションセンスを磨こうとか、流行に詳しい方がいいとか、遊びなれている方がいいと思う」そうである。

以上の議論から推測されることは、東大生には「頭がいい」「知的能力が高い」といった（あるいは意味では事実

基づいた) 肯定的イメージがある反面、「流行にうとい」「遊びなれていない」、あるいは「人づき合いが悪い」といった否定的イメージもあることである。これは、ここまで論じてきた人柄と能力を二次元とした両面価値的ステレオタイプの一つとして考えられるだろう。また、「東京大学の学生」に限定されることではなく、いわゆる「エリート」集団の成員に共通して想定されやすいイメージである。この例では、知的課題遂行能力が高いというだけで、暗黙のうちに対人関係の能力が低い(人柄が悪い)と想定される傾向が示唆される。

以上のようなステレオタイプの二次元モデルは、外国人ステレオタイプにも適用可能だろう。国際的なスポーツイベントであるオリンピック大会にもなつて外国人イメージを調査したデータを取り上げて検討したい。そのために、次の節では外国人イメージとオリンピック大会の研究そのものについて、概略を説明する。

3 外国人イメージとオリンピック研究

すでに紹介したソウル・オリンピックと外国人イメージの研究では、多数の特性形容詞尺度上で外国人のイメージを評定させて、その結果を多次的に記述している¹⁸⁾。しかし、「野蛮性」「権謀術数性」といった次元の理論的な意味づけはおこなわれておらず、特定の回答者や特定の対象国を越えて、外国人イメージをとらえる一般的枠組みとなるかどうかは不明確である。

この研究に端を発して、オリンピック報道が外国人イメージに及ぼす影響の研究が、坂元を中心とした研究グループによって四年に一度繰り返し実施されるようになった¹⁹⁾。この一連の研究では、大学生を対象にして、オリンピック

の前後に諸外国人のイメージをたずねるパネル調査を実施している。パネル調査とは、同じ質問を含む調査を同じ対象者に繰り返し実施して、回答の変化とその変化に影響する要因を検討する方法である。用いられたイメージ尺度は表7・2の一〇項目から構成された。また、対象とした国民は表7・3に示した一七程度であった。²⁰対象国民には、開催国の人、日本人、それにアメリカ人や韓国人、中国人など、日本と関連の深い国民が含まれた。また、各大陸から少しずつ含まれるように選ばれた。そして、オリンピック報道への接触の程度や回答者のいくつかの個人属性も調べて、それらがイメージ変化に及ぼす影響を検討している。

一九九二年の七月下旬から開催されたバルセロナ・オリンピック大会では、七月上旬の授業時間中に、およそ一〇〇人の学生にたいして、延べ一五ヶ国を対象として事前調査を実施し、大会終了後の八月下旬に郵送で事後調査を実施した。²¹対象国民をポジティブに評価するかネガティブに評価するかという好意度の一次元で結果を調べると、対象国民の多くにおいて、大会前に比べて大会後に好意的方向にイメージが変化したことが示された。この変化には、回答者が期間中にオリンピック番組を視聴した程度と、対象国が大会でどの程度良い成績を収めたのが関係していることも認められた。とくに、日本人と開催国であるスペイン人の変化が際だったが、一部の回答者に実施した三ヶ月後の第三回調査の結果でも、統計的に有意な肯定的変化が持続していた。他方で、ルーミア人、アメリカ人、キューバ人などにみられた大会直後の好意的変化は、三ヶ月後には大会前の水準近くに戻ってしまった。このように、オリンピック大会報道による外国人イメージの好転は、一時的なものであっただろう。他方で、韓国人と中国人にたいするイメージにはほとんど変化は認められなかった。こういった、日本に近く、類似した国民については、他の情報や歴史的背景に基づいてイメージが決まっている部分が多いと考えられる。

アトランタ・オリンピック大会でもほぼ同様にパネル調査が実施され、多くの国民のイメージが好転したことが示

表7-2 オリンピックと外国人イメージの研究で
用いられたイメージ尺度10項目

○親しみやすい	-	親しみにくい@
冷たい	-	○暖かい@
劣っている	-	○優れている*
○人がよい	-	人が悪い
○知的な	-	知的でな*
信用できない	-	○信用できる@
ごうまん	-	○ごうまんでない
○公正な	-	公正でない
粗野な	-	○繊細な*
○好き	-	嫌い@

○は肯定的方向を示す。

@は人柄（あたたかさ）を測定すると考えられる項目。

*は能力を測定すると考えられる項目。

表7-3 オリンピックと外国人イメージの研究で対象となった国民

アジア地域	韓国人、中国人、タイ人*、インド人*、日本人
ヨーロッパ地域	イギリス人、ドイツ人、スペイン人、ロシア人、ルーマニア人
アフリカ地域	ケニア人、南アフリカ人
南北アメリカ地域	カナダ人、アメリカ人、キューバ人、ブラジル人
オセアニア地域	オーストラリア人

*印の国民は、アトランタ大会以降に追加。

された。⁽²²⁾この好転には、メディア接触量が寄与していたことが、各国民ごとの分析でも示された。また、日本の成績にたいする不満度が、いくつつかの国民のイメージの好意度変化とは負の関係にあることも示された。日本の成績に不満をもつ人ほど、外国人イメージを好意的には変化させにくかったのである。

ソウル・オリンピック大会の研究結果では、開催国である韓国人のイメージが、むしろ否定的方向に変化した。ソウル大会では日本の成績は概して悪く、とくに韓国の好成績と比較したときそう感じられただろう。これは日本人にとって自尊心に脅威を及ぼす事態であり、韓国人を否定的に評価することによって脅威を解消する可能性が考えられる。韓国人イメージの悪化は、このような自己防衛的認知活動の生起によると解釈されたのである。

アトランタ大会での先の結果も、日本人としての集合的自尊心の脅威を回復しようとする学生が、一部の国民のイメージを相対的に悪く評価した可能性が考えられる。このように、オリンピック報道への接触は、ある場合には国際友好にネガティブな影響をもたらす可能性がある。他方で、日本人のイメージはもともと肯定的変化を示し、ただ一つ三ヶ月後の調査でも持続していた。この変化はいずれの大会でも頑健に認められ、「愛国心の高まり」の現われとしてとらえることができる。

しかしそれでも、諸外国人のイメージでは、オリンピック大会後に統計的に有意な水準で否定的に変化した国民はほとんど認められず、概して肯定的変化を生んでいた。⁽²³⁾アトランタ大会の研究では、諸外国人と日本人との類似性認知の評定についても詳しい検討が加えられているが、大会後にはほとんどの国民について類似性を強く認知するようになったことが示された。類似性認知の上昇は、それ自体オリンピック大会の好ましい影響と考えられるが、肯定的イメージや対人魅力につながるという点からも、望ましい効果であるだろう。

シドニー大会でも規模は縮小したが、同じバネル調査が継続して実施された。⁽²⁴⁾その結果、外国人イメージの肯定的

変化は、いくつかの国で認められたが、かなり限定されていた。開催国のオーストラリアは、カナダと並んでつねに好意度が高とも高い国であったが、それ以上の有意なイメージの上昇は得られなかった。また、好意度が上昇したロシア人やキューバ人は、事前の段階ではあまりイメージの良くない国民であった。他方で、日本人自身のイメージの上昇は、この大会でも明確に認められた。インターネットや衛星放送の普及によって、諸外国についての情報量が増大しているが、オリンピック報道の影響力は相対的に低下して、外国人イメージにもあまり影響を及ぼさなくなつたのかもしれない。

以上の一連のオリンピック研究は、外国人イメージの変化とその要因の検討のためだけでなく、外国人イメージの内容と構造をとらえるためにも貴重なデータを提供している。ほとんどの分析は好意度の一次元に還元されて実施されているが、いくつかの研究結果では、一〇項目のイメージ尺度のデータから二次元構造を見出していた。バルセロナ大会の最初の学会発表では、因子分析の結果、「友好性因子」とともに、「先進性因子」を見出して、それぞれの尺度を作成して大会前後の変化を検討した。⁽²⁵⁾ 後者の尺度は、「優れている、劣っている」「知的な、知的でない」「繊細な、粗野な」から成るもので、能力因子として解釈可能なものであった。また、アトランタ大会の一〇項目尺度を主成分分析した結果でも、第二主成分に負荷の高かった項目はバルセロナ大会と同じ三項目であった。⁽²⁶⁾

4 外国人イメージの二次元構造

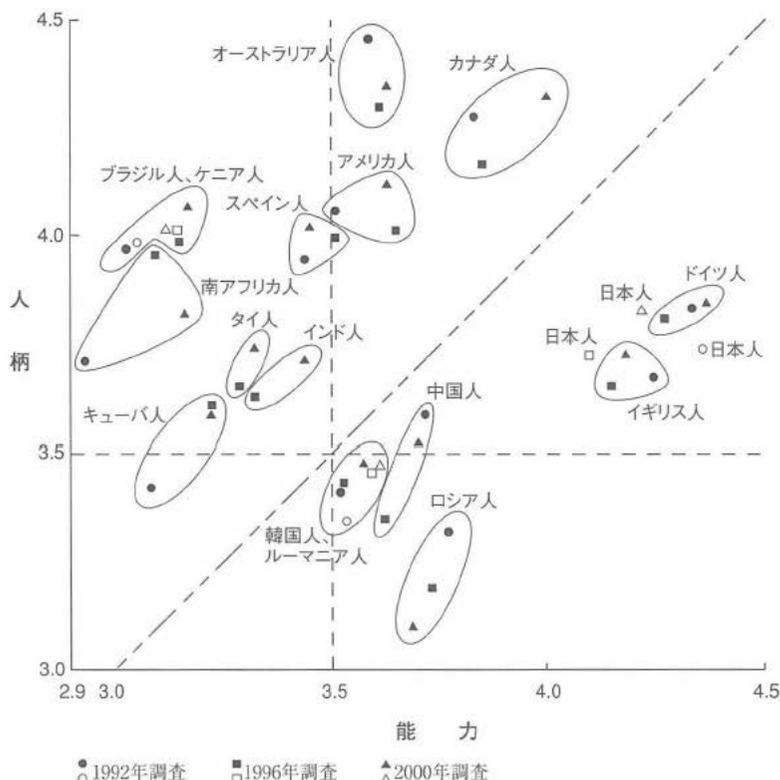
前節で紹介したオリムピックと外国人イメージの研究は、好意度という一次元の形式で結果が示されているが、因子分析などの結果から、ステレオタイプの二次元モデルが予測するような二つの因子を取り出すことができる。一つは「あたたかさ」の次元を示すもので、「好意度」や「友好性」とも重なるが、ここでは「人柄因子」と呼びたい。この具体的指標を、表7・2の一〇項目のうち「親しみやすい」「暖かい」「信用できる」「好き」を含む四項目から求める。これらが、三時点にわたる調査の多数の国民それぞれを因子分析したときに、ほぼ一貫して第一因子に負荷の高い項目だったからである。他方で、先述の「先進性因子」と同じ三項目から、「能力因子」の指標を求める。

先行研究の論文では、標準化得点から好意度指標を求めているが、三時点にわたる調査間の比較を試みるために、ここでは各項目の単純な合計値を項目数で割った値を指標とする（範囲：1～6）。人柄因子についてはこの指標を「人柄得点」、能力因子については「能力得点」と呼ぶ。なお、オリムピック研究では六点尺度が用いられており、「どちらともいえない」に当たるニュートラルな値は存在しなかったが、最大値と最小値の中間に当たる「3・5」を基準の値と考えることが可能だろう。

分析に用いるデータは、各オリムピック大会の事前調査のみである。回答者数も多く、オリムピック報道による影響も比較的小さい。もちろん、各大会の調査とも恣意的に学生をサンプリングしていて、日本人あるいは日本の学生を代表させているわけではないし、各大会の調査間の比較も厳密には保証されていない。しかし、同じ大学の同じ授業の受講生であることも多く、ある程度同質性は考えられる。また、少なくとも各調査内での「人柄」と「能力」の指標の比較は可能だろう。

バルセロナ大会とアトランタ大会のデータは元のデータを再計算して求めたが、分析の対象者合計は前者が七三八人（男三〇三人、女四六四人、不明一名）、後者が五二〇人（男一七二人、女三四八人）であった。ただし、日本人

図7-2 1992年、1996年、2000年のオリンピック大会調査に基づく外国人のイメージの2次元評価



のイメージだけを全員が回答しており、他の国民を回答したのはそれぞれこの約半数であった。シドニー大会の結果は、向田（二〇〇二）の表1に示された各国民の各項目別の平均値から計算した。したがって、分散にかんする指標は得られていない。この調査の対象者数は七一七名（男二五七人、女四六〇人）であった。

図7・1と同じ形式で、各国民の人柄得点と能力得点が変わる点を図7・2に示した。各大会毎の得点を示しているのが、各国民とも異なる記号で三つ点が示されている（インド人とタイ人は二つの点のみである）。●が一九九二年、▲が一九九六年、■が二〇〇〇年

の大会時点の調査の平均値を示す。直交する破線が、各得点のニュートラルな位置（3・5）を示す。

イメージの安定性と変化

図7・2から、まず、それぞれの国民の評定は、三つの大会時点で少しずつ変動しているが、平面上の位置が驚くほど安定していることが読み取れる。図に示したように、多くの国民の評定にかんして、他の国民と交わらないかたちで領域を描くことが可能であった。人柄得点をもっとも高い国民はオーストラリア人であったが、同じく高得点のカナダ人とは領域を異にしていた。これら国民の位置を明確にするために楕円で三つの点を囲んである。

二つの国民がほぼ同じ領域で重なっていたものは、左上のブラジル人とケニア人、そして真ん中の韓国人とルーマニア人の二組であった。この場合には、ケニア人とルーマニア人については、○△□と中抜き記号で示した。ブラジル人とケニア人ともに「あたたかい人柄だ」とみなされる反面、「能力は高くない」とみなされていた。アフリカや南アメリカなど、発展途上国の人の典型的イメージが示されているのだろう。韓国人とルーマニア人にはそういった共通性はないが、いずれもあいまいで中立的なイメージの評定がなされたと考えられる。ルーマニア人については、事実あいまいなイメージしか思い浮かばないと推測されるが、韓国人については、肯定的なイメージの人も否定的なイメージの人もいたが、平均するとこういつた位置になったと考えられる。あるいは、あいまいな評価しか表明しにくかったことも考えられる。加えて、日本人の評定結果は、ドイツ人とイギリス人の評定結果に囲まれている。混乱しないように、日本人については楕円で囲まず、同じく中抜きの記号で示した。

もちろん、いくつかの国民の評定は、時を経て変化したことが読み取れる。一九九二年の調査でもっとも低い能力得点が表示された南アフリカ人は、その後イメージを好転させている。これはおそらく、一九九四年の人種隔離政策

(「アバルトヘイト」) 撤廃による影響だと考えられる。キューバ人のイメージも、原因は不明であるが、一九九二年から九六年にかけて良くなっている可能性が高い。

他方で、図の一番下側に位置するロシア人のイメージは、一九九二年以降人柄の側面で悪化したと読み取れる。ソビエト連邦が崩壊したのが一九九一年であり、一九九二年のバルセロナ・オリンピックにはロシアは独立国家共同体をチームとして参加した。その後一九九六年からはロシア単独のチームとして参加しているが、「ロシア人」というイメージは、旧ソビエト連邦諸国の人のイメージから分離して、その後明確化してきたことも考えられる。また、次の中国と同様、ロシアは日本と国境を接する国であり、北方領土問題など紛争の火種を抱えている。潜在的な競争的関係が強まったと知覚されたことが、人柄イメージの悪化につながっているのかもしれない。

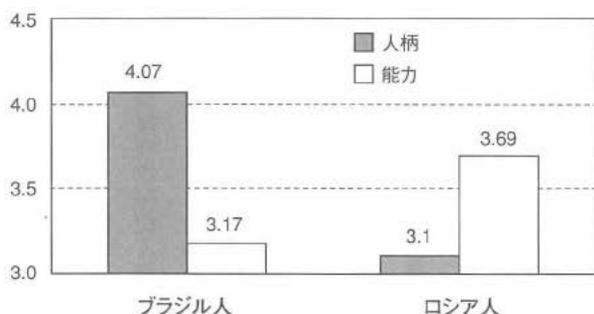
この点は、中国人の人柄イメージの悪化についても、同様に指摘できる。中国人の場合は、一九九六年から二〇〇〇年にかけての悪化が読み取れるが、日中間のなんらかの政治的問題が影響しているのかもしれない。

加えて、日本人自身については、能力イメージの悪化が読み取れる。それでも、諸外国人イメージと比べて、かなり肯定的な能力評価がなされていることには変わりない。人柄イメージについては、他の外国人と比べても、とくに良いわけではない点とは対照的である。

人柄イメージ優位の国民と能力イメージ優位の国民

第二に読み取れることは、人柄得点が高い国と能力得点が高い国とが、みごとに弁別されることである。図の中に、各次元の得点と同じ値となるところを結んだ斜めの線を二重破線で示した。この線の左上が人柄優位と評価された国民であり、右下が能力優位と評価された国民である。たしかに、人柄だけが飛び抜けて評価が高く能力評価は低い国

図7-3 人柄優位のイメージと能力優位のイメージ



(極端に左上の位置) や、能力だけが飛び抜けて評価が高く人柄評価の低い国(極端に右下の位置) は見当たらない。この線で区分された左上の領域と右下の領域それぞれを観察すると、人柄評価と能力評価とは、国民を単位として考えた場合、一見相関するようにも見て取れる。実際、個人を単位として調べても、特定の国民にたいする人柄の評価と能力の評価とは、相関係数の値は小さかったが、しばしば正の有意な相関を示した。しかしそれでも、各国民の評定は、ほとんどの場合、両次元の得点間で、かなりはつきりとした差が認められたのである。アトランタ大会の場合、韓国人を除いて、各対象国民の人柄得点と能力得点との間の差は、一パーセント水準で統計的に有意であった。

典型的な例としてブラジル人とロシア人を挙げることできる。一九九六年のアトランタ大会の事前調査の結果を棒グラフで示すと、図7・3のようになった。ブラジル人の場合は、人柄評価の平均値は中立的値よりも高いが、能力評価がそれより下である。他方で、ロシア人のイメージはそれとちょうど逆のパターンを示した。西欧諸国の人々は概してイメージが良く、いずれの得点も中立的な値よりも上であった。しかし、たとえばドイツ人とオーストラリア人のイメージ得点を比べると、ドイツ人では能力得点が圧倒的に高く、オーストラリア人では人柄得点が高いことがわかる。

先進諸国のイメージと発展途上国のイメージ

先の二重破線とほぼ直交する方向に、たとえば各次元の「4・5」を相互に結びように直線を引いたとすれば、各国民はもう一つ別の二つの領域に分けることができる。右上側が歴史的に西欧列強に由来する、いわゆる先進諸国である。これらの諸国は、優位である側面は異なっても、またスペイン人のように能力の点ではやや低く評価される場合があったとしても、総合的にはポジティブに評価されている。ステレオタイプの二次元モデルの観点からは、そのなかでも人柄優位な国民と能力優位の国民とが、かなり隔たつて存在する点が重要だろう。前者には、多文化主義的な国（例…アメリカ）や南欧の国（例…スペイン）の人々が含まれ、後者には伝統的な西欧諸国（例…イギリス）の人々が含まれる。日本人自身も、後者の伝統的諸国の人々の近くに位置づけられていた。

他方で、左下の領域には、東欧、アジア、中南米、アフリカの人々が位置づいている。これらの国民はなんらかの点で相対的に否定的な評価を受けており、日本人が抱く偏見の対象となる可能性がある。このうちブラジル人を典型とする左上の領域を占める人々は、いわゆる「発展途上国」の国民を示しているだろう。この人たちは素朴であたかい人柄が高く評価されるが、能力は低く、場合によっては自力で経済発展できないとみなされてしまうかもしれない。この見方が固定するとすればステレオタイプであり、偏見につながる可能性がある。

中央下側の国民にたいしては、能力は平均以上だとみなされているが、人柄の点ではもつとも悪いと感じられる人々である。ここには、日本と国境を接する国の人や共産主義国家あるいはその後継国家あると解釈できるだろう。こういった国々は日本とのあいだに少なくとも潜在的には競争関係がある。ステレオタイプ二次元モデルによれば、競争関係が「つめたさ」にかんする評価を促進する。このカテゴリーに含まれる国民にたいしても、否定的なステレオタイプや偏見の形成と維持が懸念されるのである。

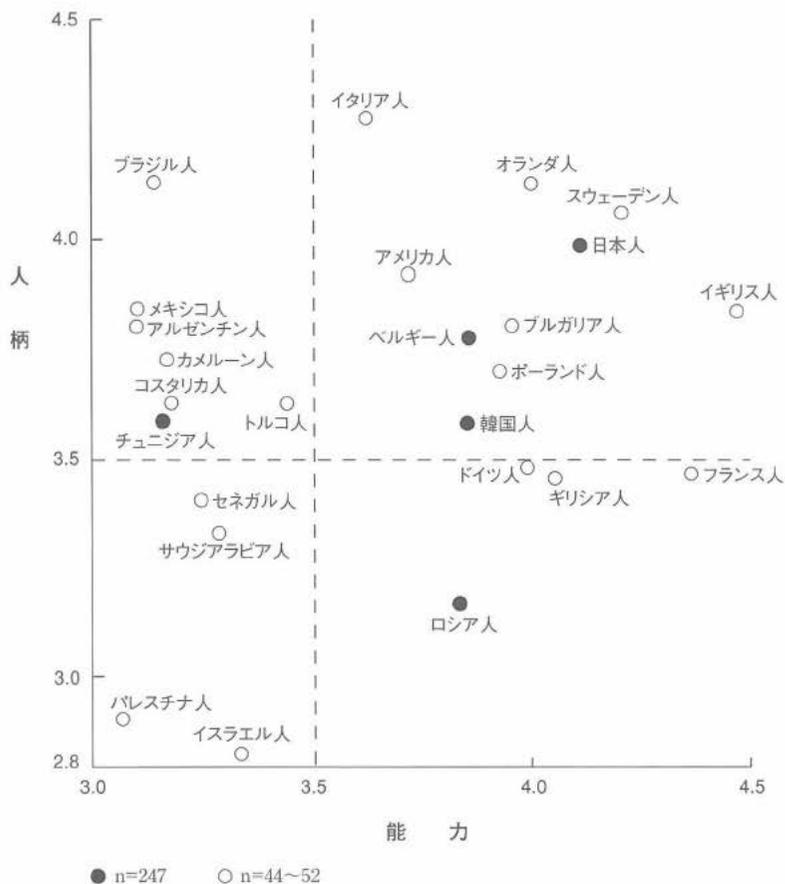
以上のように、オリンピックと外国人イメージの研究データを再分析すると、諸外国人のイメージはステレオタイプの二次元モデルの枠組みのなかに、かなり明確に位置づけられることがわかる。そこに独特の位置を占めるし、なぜそうなるのかも多くの場合解釈可能であった。しかし、オリンピック研究で対象とされたのは、限られた範囲の国民であった。世界にはまだまだ多くの国があり、その国民が生活している。取り上げられなかった他の国民に一般化できるのか、さらに検討が必要だろう。

日韓共催ワールドカップサッカー大会と外国人イメージ

そこで、二〇〇二年に日本と大韓民国との共催で実施された、ワールドカップサッカー大会にもなつて実施された外国人イメージ研究データの再検討も試みた。⁽²⁸⁾このパネル調査研究は、対象者が二つの大学だけで、人数もそれほど多くなかった(男一〇二名、女一四三名、不明二名。合計二四七名)。しかし、オリンピック研究とは異なる多数の諸外国人を、ほぼ同じ一〇項目尺度を用いて調査して、人柄得点と能力得点も計算可能であり、貴重なデータと思われる。⁽²⁹⁾

再計算の結果に基づいて、人柄得点と能力得点で現わされた各国民の位置を、図7・4に示した。図の中で●印で示されたチュニジア人、ロシア人、韓国人、ベルギー人、そして日本人にたいしては、調査対象者全員が回答した。⁽³⁰⁾その他の○印の国民は五つのリストに分けられ、それぞれ対象者の一部だけ(四四名〜五二名)が回答した。したがって、回答者が少ないため平均値の信頼性は低いことに注意が必要である。たとえば、イギリス人の評定値はオリンピック研究(図7・2)とほとんど同じ位置だが、ドイツ人の評定値は人柄、能力次元とも、オリンピック研究での評定から否定的方向にある。しかし、能力得点の方が有意に評価が高いという特徴は残している。このように評定値

図7-4 2002年ワールドカップサッカー大会調査に基づく外国人イメージの2次元評価



そのものは目安にすぎないが、人柄得点と能力得点の組合せで示されるイメージについてはその特徴をとらえることが可能だろう。

この図から、まず、ブラジル人を典型とする人柄優位で能力が低いと知覚されている国民イメージを複数読み取ることができる。図の左上の領域に位置する国民で、いわゆる「発展途上国」の場合が多い。それと正反対の能力優位で冷たい人柄とイメージされた国民がロシア人だけであり、オリンピック研究の結果とは一貫するものである。

次に、右上側のいわゆる「先進国」に相応する国の人々のイメージのなかにも、イタリア人に代表される人柄優位でイメージされる国民と、フランス人に代表される能力優位の国民とが見出された。この二つはオリンピック研究には含まれていなかったが、それぞれ典型的なイメージをもたれる国民だろう。加えて、スウェーデン人やオランダ人に示されるように、いずれの次元でも得点が高く、表7・1の区分にしたがえば「賞賛」のカテゴリーに属す国民も認められた。この調査では、内集団である日本人も、ほぼ同じところに評価された。これらの国民イメージは、人柄あるいは能力のどちらか一方の側面が優位なわけではない。加えて、ベルギー人やブルガリア人など、いずれの次元の得点もある程度高く、両者にほとんど差がないよう評価された国民もいくつかあった。

そして、左下の領域に位置する、人柄の点でも能力の点でも低い評価しか得られなかった国民も認められた。パレスチナ人とイスラエル人である。両国は長年にわたって紛争状態にあり、武力を用いた報復活動が続いている。こういった国の人々にたいしては、軽蔑的なイメージが生まれてしまうのかもしれない。

5 二次元構造を越えて

本稿ではここまで、ステレオタイプの二次元モデルを日本人大学生の外国人イメージに適用できることを示してきた。日本人の外国人イメージも人柄と能力の二次元で把握可能であり、両次元が背反的评价を示す両面価値的イメージも存在しうることを示した。オリンピック大会を直後に控えた時点の特定の学生を対象とした調査データをもとにしていて、得られた結果の一般性については今後も検討が必要である。しかし、いくつかの調査を通じて一貫した結

果が得られているし、対象国と日本との間の競争・協力関係と地位の上下関係の観点から、人柄次元、能力次元の結果は解釈可能であった。対象国民のイメージを、好きか嫌いかの一次元だけでなく、二次元による記述と理解をおこなうことが今後求められるだろう。

とくに求められることは、たんに現状の記述だけではなく、変化を記述し、それが生じるメカニズムを理解する試みである。本稿でも、三時点のオリンピック研究データを用いて、変化の記述を試みた。しかし、約八年間の時間経過では、外国人イメージは概して安定していた。もう少し長期間のデータが利用可能となれば、もっと明確な変化を二次元モデルのなかで把握可能になったかもしれないが、残念ながらそういった量的データを得ることはできなかった。

もちろん、変化のたんなる記述だけではなく、その変化をうながす要因の検討こそが、本来求められることである。本稿で紹介したオリンピック研究では、大会前後の短期的な変化と、それにオリンピック報道が影響していた点について明らかにしている。しかし、二次元構造の観点からのこういった動的過程の検討は、まだ始まったばかりである。また、外国人イメージがもっと長期的に維持されるような変化と、その原因の特定については、今後の検討を待たなければならぬ。こういった歴史にかかわる問題について量的データを用いて、しかも二次元モデルの上で検討できるとしたら、とても興味深い研究となるだろう。

二次元構造による集団のイメージ理解は、確かに有用なツールである。しかし、現実の各集団のイメージは多様であり、必ずしも二つの評価軸上だけに限定されるものではない。たとえば、「日本人の勤勉さ」は、人柄次元上の評価なのだろうか、能力次元上での評価なのだろうか。実際、もっと次元を増やして各集団のイメージをとらえる試みも存在する。たとえば、四九もの国民集団についてパーソナリティの自己評定と他集団評定をおこなわせて、五次元

(ビック・ファイブ) モデルの観点から、自己評定と他集団からのステレオタイプの評定とが乖離しやすいことを示した研究もある³⁾。しかしながら、どういった集団間関係にあるときに、どの次元でステレオタイプの評定がおこなわれやすいのかといった理論的検討は、少なくとも現在のところ困難だと考えられる。

また、集団間イメージ理論では、集団間関係を三つの次元からとらえ、少なくとも五つのタイプの外集団イメージを類型化している¹⁰⁾。三つの次元とは、目標の両立可能性、地位の上下関係、パワーの大小関係である。このうち、目標の両立可能性は二次元モデルの競争・協力関係に対応し、地位の上下関係は、文化的側面に限定されているが二次元モデルとはほぼ一緒である。地位とは別に、政治的、経済的、軍事的側面での力関係を反映する次元として、パワー(権力)を考慮するところが独特である。政治学の領域から実際の外国(人)イメージを考察すると、パワーの大小関係の理解が必要だと考えられる。

そのうえで、すべての関係を類型化するわけではなく、また地位とパワーについては同等の関係も考慮に入れて、次のような五つの外集団イメージのタイプを想定した。まず、目標が両立して、地位もパワーも等しい場合には、協力関係が生まれやすく、「盟友(ally)」としてとらえられる。次に、目標が両立せず、地位もパワーも等しい場合には、「敵(enemy)」イメージが生じやすい。第三に、目標が両立せず、地位は低いパワーが強い外集団にたいしては、「野蛮人(Barbarian)」イメージが当てはまる。第四に、目標が両立せず、地位もパワーも低い外集団にたいしては、「従属(dependent)」する者としてとらえられる。そして、目標が両立せず、地位もパワーも上の外集団にたいしては、「帝国主義者(imperialist)」イメージが生じやすい。後者四つはいずれも競争的関係にあり、外集団にたいして否定的なイメージが付与される場合である。

こういった実際的な試みは興味深く、ステレオタイプの二次元モデルでもパワーの大小関係を地位の上下関係とは

区別して考慮する必要が生じるかもしれない。集団間イメージ理論では、政治的対立や軍事的紛争が生じている関係を主として念頭においており、その解決のために必要な類型化を提示しているだろう。しかし、友好的で協力的な関係の場合の検討は不十分であるし、その場合にも三次元を組み合わせた枠組みを出発点にすることは、かえって煩雑で理解しにくいモデル化となってしまうかもしれない。二次元を基礎としたモデルを考え、必要に応じて特別の類型を設定していく方略の方が生産的かもしれない。

また、このイメージ理論は架空のシナリオ評定に基づく検証と、アメリカ国内の人種関係についての検証がおこなわれているだけで、肝心の国際関係についての実証的証拠は乏しい。また、性格特性次元の評定といったかたちでイメージが測定されているわけではない。こういった点にかんする実証的検討を積み重ねたうえで、必要に応じて二次元モデルを拡張していくことが望ましい方向だろう。

加えて、国際関係は相互的なものであり、日本人における外国人イメージの検討だけではなく、他の国民における外国人イメージの検討をおこない、両者を関係づける必要がある。相互的イメージの実証的検討が望まれるだろう。

(1) 次の論文の研究²⁾。Devine,F.G. Stereotypes and prejudice: Their automatic and controlled components. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1989, 56, 5-18.

(2) ステレオタイプとステレオタイプ化についての社会心理学研究の簡単な紹介は次の本の6章「集団間認知とステレオタイプ」などを参照のこと。亀田達也・村田光二「複雑さに挑む社会心理学——適応エージェントとしての人間」有斐閣、二〇〇〇年。

(3) Katz,D. & Braly,K. Racial stereotypes in one hundred college students. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 1933, 28, 280-290.

(4) Fiske,S.T., Cuddy,A.J.C., Glick,P., & Xu,J. A model of (often mixed) stereotype content: Competence and warmth respectively follow from status and competition. *Journal of Personality and Social Psychology*, 2002, 82, 878-902.

- (5) 原谷達夫・松山安雄・南寛「民族的ステレオタイプと好悪感情についての一考察」教育心理学研究、一九六〇年、八巻、一・七頁。
- (6) Katz, D. & Braly, K. (1933) 前掲論文。
- (7) 我妻洋・米山俊直「偏見の構造——日本人の人種観」日本放送出版協会、一九六七年。
- (8) 比較的最近になっても日本人の黒人に対する否定的態度を問題として告発しているものに、ラッセルの次の著作がある。ラッセル、J・G・「日本人の黒人観——問題は「ちびくろサンボ」だけではない」新評論、一九九一年。
- (9) 辻村明・金圭煥・生田正輝(編)「日本と韓国の文化摩擦——日韓コミュニケーション・ギャップの研究——」出光書店、一九八二年。
- (10) 堀洋道「日本人の外国評価とその特徴」日本人研究会(編)『日本人研究 No.5 特集 日本人の対外国態度』至誠堂、一九七七年、八一・一二九頁。
- (11) もちろん、日本人にとってある「国」のイメージとその国の「人」のイメージとはかなり重なっている。しかしながら、「軍事的」など国を形容する言葉と、「あたたかい」など人を形容する言葉とは、評価次元が異なるだろう。また、国への否定的態度に比べて人への否定的態度はそれほど強くないことも認められる。辻村たち(一九八二)の研究では、国と人のイメージ両者を測定し、関連と異同を調べている。
- (12) 高木栄作・坂元章「ソウル・オリンピックによる外国イメージ——大学生のパネル調査——」社会心理学研究、一九九一年、六巻、九八・一一一頁。
- (13) Gluck, P. & Fiske, S.T. Ambivalent sexism. In M.P.Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol.33). San Diego, CA: Academic Press, 2001, pp.115-188.
- (14) この「男性・作動的 (agentic)」「女性・共同的 (communal)」というジェンダー・ステレオタイプが、固有の性質に基づくのではなく、各カテゴリーに割り当てられやすい役割の性質に由来することを示したのが Early たちの研究である。Early, A.H., & Steffen, B.T. Gender stereotypes stem from the distribution of women and men into social roles. *Journal of Personality and Social*

- (15) Fiske et al., (2002) 前掲論文。
- (16) 図からは省かれている「内集団」に対して人柄も能力も高く評価し、「生活保護受給者」に対して両方とも低く評価することを除いて、他の集団は両面価値的に評価されていた。
- (17) 刈谷剛彦「東大入試と東大生——東大生はどのように生まれるのか？」東京大学公開講座「東京大学」東京大学出版会、一九八八年、五三・八三頁。
- (18) 高木栄作・坂元章 (1991) 前掲論文。また、坂元章「認知的複雑性」と「社会的知覚システムの進展」風間書房、一九九三年の第7章「多次元性の指標による社会問題に関する研究」も参照のこと。
- (19) 一連の研究の概要については、次の論文、学会発表を参照のこと。村田光二「オリンピック報道と外国人イメージ」岡隆・佐藤達哉・池上知子(編)「偏見とステレオタイプの心理学」現代のエスプリ三八四号、一九九九年、二一六・二二五頁。向田久美子・村田光二・坂元章・高木栄作「オリンピック報道と外国人・日本人イメージ」日本スポーツ社会学会第一四回大会抄録、二〇〇五年。
- (20) 回答者の負担を考慮して、対象国民を二通りの組合せに分け、いずれかの組合せのみに回答を求めた。一人の回答者は、必ず日本人を含む、九程度の国民について回答した。
- (21) Sakamoto, A., Murata, K., & Takaki, E. The Barcelona Olympics and the perception of foreign nations: A panel study of Japanese university students. *Journal of Sport Behavior*, 1999, 22 (2), 260-278. 第二回の事後調査によってパネル・データが得られ、分析の対象となった回答者数は六八一人であった。また、第三回の調査までパネル・データが得られた分析対象者数は一七四人であった。
- (22) 向田久美子・坂元章・村田光二・高木栄作「アトランタ・オリンピックと外国イメージの変化」社会心理学研究、二〇〇一年、一六卷、一五九・一六九頁。
- (23) バルセロナ大会では、対象とした一四の外国人のうちケニア人のイメージだけが、またアトランタ大会では、対象とした一六の外国人のうちインド人のイメージだけが、統計的に有意に否定的方向に変化した。
- (24) 向田久美子・高木栄作・村田光二・坂元章「シドニー・オリンピックによる外国イメージの変化(1)——好意度の変化と持続

- 」日本社会心理学会第四三回大会発表論文集、二〇〇二年、三三八・三三九頁。
- (25) 村田光二・坂元章・高木栄作「バルセロナ・オリンピックによる外国イメージの変化(1)——研究の概要と単純集計結果——」日本社会心理学会第三四回大会発表論文集、一九九三年、一四二・一四五頁。
- (26) 向田久美子・坂元章・村田光二・高木栄作(二〇〇二)前掲論文。
- (27) 向田久美子「大学生のもつ外国人・日本人イメージ(1)——イメージの構造——」聖セシリア女子短期大学紀要第二七号、二〇〇二年、四一・四八頁。
- (28) Murata,K. & Takabayashi,K. *Changes in ambivalent stereotypes of Japanese students toward foreign peoples due to the 2002 World Cup soccer*. Poster presented at the 14th General Meeting of the European Association of Experimental Social Psychology, 2005, Wurzburg, Germany. 研究方法については、次の学会発表も参照のこと。村田光二「韓日W杯サッカー大会における日本人大学生の韓国人、日本人イメージの変化と自己奉仕的帰属」日本グループ・ダイナミックス学会第五〇回大会発表論文集、二〇〇三年、一二二・一二三頁。
- (29) 表7・2に示された「(1)うまんな・(2)うまんでない」が「攻撃的な・攻撃的でない」に変更されたほかは、他の九項目は内容も順序も同じで用いられた。前掲のMurata & Takabayashi (2005)の研究では、三項目のあたたかさ(人柄)尺度と二項目の能力尺度が用いられた。これは、三番目の次元として「攻撃性」を測定したことにともなっている。
- (30) チュニア、ロシア、ベルギーのチームと、日本チームは一次予選で対戦することが決まっており、大会後のイメージ変化の可能性が高かったため、重点的に調査したためである。韓国は、もう一つの主催国であった。
- (31) Terracciano,A. et al., National character does not reflect mean personality trait levels in 49 cultures. *Science*, 2005, 310, No.7, 96-100. この研究は八六名の共著者が列記されているが、第一著者以外は省略した。
- (32) Alexander,M.G., & Brewer,M.B. Images and affect: A functional analysis of out-group stereotypes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1999, 77, 78-93. Alexander,M.G., Brewer,M.B. & Livingston,R.W. Putting stereotype content in context: Image theory and interethnic stereotypes. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 2005, 31, 781-794.